

# 子どもたちの育ちの力を信じて

高坂悦子

私は現在お茶の水女子大学いずみナーサリー（以下、ナーサリー）で非常勤として保育の仕事をしています。それまでは〇〇五歳児までの定員百名の保育園に勤めており、出産、仕事復帰、出産を繰り返して、現在は三人の子と育ち合う母でもあります。

## さながらのかかわりあいに関いがあふれて

保育園に勤めていたころは、子どもたちと過ごす時間はたっぷりであり、あせることもなく、毎日の生活の中で私が子どもたちを大切に思う気持ちを伝

え、子どもたちの思いを受け入れ、成長を感じ合いながら過ごしました。そのような日々の中で、お互いを思う気持ちや、仲間とつながり合う心地よさを育み、言葉にせずとも、何だかお互いの思いが通じ合っているなあと感じる時の喜びはとても大きいものでした。

保育園勤務時代に、たとえばこんなことがありました。年長児を担任していた時のことです。三人兄弟の末っ子のEちゃんはいつもお昼寝の時間に、「先生、来て」と保育士を呼びます。すぐにそばに行け



る時であれば、ほかの子どものそばにいて、なかなか行けないこともあります。その日はいつものようにEちゃんに呼ばれながらも、ほかの子どもについていました。ふとEちゃんを見ると、ぼやくとした心地よい表情でいまにも眠りそうです。その気持ちよい時間を大切にしようと思い、あえてそばには行かずにいると、

「先生、来なくていいよ」とEちゃんが私に声をかけました。私は声を出さず、そつとうなずきました。しばらくするとまた

「先生、来なくていいよ」と言います。私は静かにそばに行き、

「Eちゃん、一人で眠れるんだよね」と声をかけました。

「うん」とうなずき、Eちゃんはすやつと眠ったのです。

これは毎日の保育の中のほんの小さな小さな出来事です。でも、いつも大人がそばにいて安心

して眠っていたEちゃんが、大人がいなくても、自分で眠れるんだよ！と私に訴え、自分自身でそうすることができると自信をもてた大切な瞬間でもありました。その時を共に迎えられたことは、私にとっても大きな喜びでありました。

このような出来事が日々の保育の中にはたくさんあります。時には支えとなり、時には信じて見守るなど、その時々の子どもとのかかわりにより配慮も変わっていきますが、どうしてそうしたのか、そうするべきと思ったのかは、その時の子どもと私とのかかわりから生まれてくるもので、自然とそうなっていく、まさに「さながら」のかかわりと思えます。

このような保育園時代の思い出は、いま思い返しても胸が高鳴るほどのぜいたくな時間です。

いま、保育の現場は多様化しています。現に、いまナーサリーでは、利用日数が人によりさまざまで、週に一度の登園の子どもたちもいれば、週二日、



週三日、一時預かりでの登園の子どもたちもたくさんいます。一時預かりのように、初めてナーサリイに来て、数時間のみ過ごす子どもたちにとつても、少しでも心地よい場となるようにと保育士は願います。一度だけの利用であつても、その場限りの出会いととらえるのではなく、短くても、一回でも、心豊かに育つ大切な時間を私たちが共にするのです。これはとても責任があると共に、人と人とかかわり合える貴重な時間を得たことでもあります。残念ながら、ゆつたり時間をかけて関係を築くことはできませんが、精いっぱい思いを伝え、受け入れていきます。「大丈夫、あなたと一緒にいるからね」、「大丈夫、ここで少しでもあなたが気持ちよく過ごせるようにしていきましょう」と。心を込めて。

私の感触としては、その思いは子どもたちに届いているよう感じます。まなざし、抱かれた体の感触、体温、そして言葉かけ。大人よりも素直に身体いっぱいを感じとる子どもたちの自然と備わった能

力がそうさせる、それは必然なのだと思います。

大人の温かな思いを敏感に感じとる子どもたちはそうでない時の思いも、感じていることと思います。たとえば、遠方から通う子どもたちは、電車の中では、小さいながらも周りの人や、親の思いを表情や雰囲気から感じとることでしょう。大きな声を出したりすると親が何とかなだめようとしたり、困ったりします。それ以外にも。子育てをしながら親が背負っているものはたくさんあります。時にどうしてもそのままのわが子の姿を受け入れられず、こうあつてほしい、こうあるべき、という思いが子どもの行動や思いに制止をかけてしまっていることも少なくないと感じます。「頑張つて」とか「練習しよう」なんていう言葉が聞かれると、少々戸惑いを覚えます。もちろん愛情あつてこそこのことでしょうが、保護者の気持ちが行先してしまい、実際の子どもは少し窮屈な思いをしているのでは、と感じることもあります。親と子どもの気持ちのズレという



のでしょうか。正直、私自身も自分の子育てを振り返ると思ひ当たることがあります。

しかし、保育者としての私は、子どもたちには自分の思いをそのままに出してほしいと願っています。いやだ、いやだの気持ちも、母を恋しがる思いも、体調がすぐれずグズグズするのももちろん。それらを出し合いながら一緒に日々を過ごしていきたいと思っています。未来に向かって。

### 変わりゆく中にも変わらず大切にしたいこと

現在二歳児のYちゃんの事例を紹介します。Yちゃんは、仲良しだったお友達が四月から幼稚園に入り、それまでの担任も○歳児の担当となり部屋が別れてしまいました。朝登園すると、以前の担任を求め、○歳児の部屋へ行きます。食事の時は椅子にこだわりをみせ、青の椅子を求めます。お弁当は好きなメニューでないと「食べない」と言ってみたり、午睡の布団は隣の人を指名したりします。

これらの行動をどう受け止めていくか、職員間で話し合いました。言って聞かせれば理解もできます。「ダメなんだよ」と制止することもできます。

しかし私たちは、Yちゃんの思いをくんでいき、方向性を示したり、自分で選択して決める手伝いをしたりしていくことにしました。○歳クラスに行きたいと言う時は一緒に行き、赤ちゃんの過ごす様子を一緒に見たり、散歩のしたくをしていれば、

「後から行くからね」

と○歳児クラスの人たちに伝え、ルンルンと部屋に戻り、散歩のしたくをしました。うれしい思いも、何だか納得できない気持ちも、一緒にわかり合うようにしました。

変化は確実に現れ、食事の椅子は、人数が多くて青がない時は、

「しかたないね」と、共に残念なことができるようになりました。

「Yちゃんの隣がいいよ」と言う時は、



「うちゃんが好きなんだよね」と伝えると、

「うん。好きな」と安心した表情で笑います。がむしやらの思いを伝えずとも大丈夫と感じてくれているように思います。

つい先日は、午睡明け、まだ眠くてグズグズ言いながらも、しっかりと甘えを出し、私のひざでやつをおかりして食べた後は、

「ごちそうさま」とニツカリ笑って遊びにいきました。お迎えの時は

「また遊ぼうね」と伝えると、

「うん。また明日遊ぼうね」とにっこり笑って帰ります。Yちゃんの心が動いているのです。なぜそうなるのでしょうか。

私が考えるに、こうしたい、こうさせたいと思う時点で、子ども自身を否定していることにつながってしまっているのではないのでしょうか。子どもはそもそも、育ちの力をもって生まれてきているのですから、その力を信じ、寄り添い、私たちの願いを心



にもっていればいいのではないかと。願いとは大きなハードルではありません。いまはまだ小さな集団にいるあなたが、この先大きな社会に出た時に自分をしっかりと愛せること、周りの人を大切に思うこと、力を合わせていくこと、あなたのために……と願う思いは伝わるのではないのでしょうか。

もう一つ、私たちが大切にしているのは生活のリズムです。年齢や月例でグループを分けるのではなく、その日の一人ひとりの状況に応じて食事時間や午睡の時間を毎日考えていきます。朝早く起きた



子、遅く目覚めた子、体調のすぐれない子、眠たい子。一人ひとりによいと思われるリズムをつくっていくことで、心地良く食べ、眠ることができるので、それは身体と心の安らぎにつながっていると確信できます。そして、一人ひとりの安らぎは、個々のものとしていつまでもバラバラなのではなく、保育の場合全体の心地良いリズムにつながります。

一人ひとりのそのまますけいれ、願いをもつて寄り添うこと。そして、たづり遊び、食べ、眠ること。身体も心も健やかに、また心地良く明日を迎えられるようにと。これも「さながら」。

何がよいとか、こうするべきとかではなく、私たちも流動的にその時その時の「さながら」であること。それを可能にするためには、保育士間の連携が要となるでしょう。普段から周りをしっかりと見て、子どもと大人の動きを知っておく。いつもと違う様子で、子どもが特定の大人を求めた時は、求められた大人がしっかりと応じ、ほかの大人がそれが可能

となるよう、そのほかのことをしっかりとサポートしていく。「さながら」の関係をみんなだ認め合いい、つくり合う、とでもいうのでしょうか。子どもが特定の大人を求めるのは、ごく自然なことでしょう。その思いにんえていけば、子どもは自ら大人の手を離れ、自分から視野を広げ、周りの人とのかわりを求めていきます。

この、ごく自然な「さながら」の保育を実践するのは、実は意外と難しいことかもしれせん。これを少しでも可能にするために、私たち保育士は努力を重ねていくべきでは、と考えます。保育士同士、子どもたちの健やかな成長を願う思いに違ひはないのですから。保育士も含め、保護者も、そしてもちろん子どもたちも、それぞれが自分らしく、みんなで育ち合っていけること。

保育の場合はそんな場であつてほしい、と願っています。

(お茶の水女子大学いずみナーサリー)